祖父母との関係が女子大学生の自尊感情と自己受容に与える影響

森　下　正　康　　上　田　佳　乃
（児童学科）　　（児童学科11期生）

本研究の目的は，孫と祖父母の関係が孫の自尊感情や自己受容にどのような影響を与えるかを明らかにすることであった。女子大学生313名を対象とし，孫・祖父母関係，自尊感情，自己受容について質問紙調査をおこなった。因子分析をおこなった結果，孫・祖父母関係については「心の支え」「人生の指針」「理解共感」の３因子が得られた。自尊感情と自己受容についてはそれぞれに対応する因子が得られた。各因子に対応する尺度を構成し，α係数を算出して尺度の信頼性を確認した。共分散構造分析の結果，次のことが明らかとなった。⑴現在同居の祖母について，祖母を自分の「人生の指針」としているほど，孫の『自尊感情』や『自己受容』が高かった。別居の祖母については，そのような影響は弱かった。過去同居の祖母に関しては，「人生の指針」は自己への「いたわり感謝」因子を強く高めていた。⑵現在同居の祖父について，「心の支え」は『自尊感情』を，「理解共感」は『自己受容』を高めていた。しかし，別居の祖父についてはそのような関連はみられなかった。分散分析の結果，現在同居の祖母について，⑶祖母の「理解共感」が高く，「心の支え」または「人生の指針」が高い群は「弱点受容」得点が非常に高かった。また，同居の祖母の「心の支え」と「人生の指針」が高い群は『自己受容』のなかの「いたわり感謝」得点が高かった。以上，女子大学生にとって同居別居を問わず「人生の指針」としての祖母の影響の大きさと，祖父の「心の支え」「理解共感」の重要性が注目される。

キーワード：孫と祖父母，自己受容，自尊感情，女子大学生

問　題

祖父母と孫との関係が，孫の発達にどのような影響を与えるかは重要な課題である。しかし，このようなテーマを扱った研究は少なく，その詳細は明らかでない。そこで，本研究において，女子学生を対象に，祖父母と孫との関係が孫の自尊感情や自己受容にどのような影響を与えるかに焦点を当てたい。

祖父母と孫の関係の特徴

杉井（2006）によれば，祖父母と小学生の孫との関係は親和的であるが，それより年上の孫との親和関係は弱かった。渡辺（2008）の結果でも，祖父母とのかかわりの頻度は，小学校から大学生と年齢が上がるにつれて低下していた。彼は，大学生が自立をめぐって親とぎくしゃくするところに，祖父母が孫を理解し，親と孫との仲を調整する役割が生じてくると指摘している。また，佐々木（1994）によると，親は子どもとの距離感が近すぎるために「しかる」という役割を多くもっている。それに対して，祖父母と孫との間は近すぎず遠すぎずという距離感である。そこで，祖父母には「怒られたときに慰めてくれる」「褒める」という役割があると指摘している。

田畑・星野・佐藤・坪井・橋本・遠藤（1996）は，祖父母の寛容さや孫のために親身になることが孫の心の支えとなると指摘している。さらに，孫は祖父母に，親にはできないよ

うな相談をすることができ，理解共感してもらうことができるという。また田畑ほか（1996）は，「孫―祖父母関係尺度」を作成する過程で，孫からみた祖父母について「存在受容」「日常的，情緒的援助」「時間的展望促進」「世代継承促進」の４つの機能を見出した。

祖父母から孫への影響

祖父母と孫との関係は，母親と孫との関係や孫の行動に重要な影響を与える。Barnett, et al.（2010）によれば，幼児をもつ母親の報告において，母方の祖母の孫に対するかかわりが多いほど，孫のネガティブな情動反応と低い社会的能力との結びつきが少なかった。さらに，祖母のかかわりが多いほど，母親の厳しい育て方と孫の問題行動とのつながりを防いでいた。

それでは，孫の自尊感情や自己受容の形成に祖父母はどのような影響を与えているのだろうか。小嶋（小嶋・森下，2009）は，自己受容の基礎には，自分という存在についての全体的な評価とそれに伴う感情，すなわち自尊感情が働いていると指摘している。自己受容は，ある程度自己を現実的に捉えた上で，プラス・マイナス両面を含んだ自分という存在を肯定して受け容れることと定義さる。さらに自分を高めていこうとする意欲があることが真の意味での自己受容だと小嶋は指摘している。

他方，自尊感情は自分を大切に思える感情であり，自分が重要だと考える側面での有能性と，それを支持する身近なおとなや仲間の評価を基盤に形成される（小嶋・森下，2009）。自尊感情の在り方は親や仲間などの他者から影響を受け，特に青年期前期には親子関係からの影響が顕著であるとされている（北尾・中島・林・広瀬・高岡・伊藤，2010；中間，2007）。青年期は，親子関係が乱れやすい時期であるので，そのような時期に家族のなかに祖父母という存在があり，かつ自分を受け止めてくれるような関係があれば，自己受容や自尊感情の低下を防ぎ，場合によっては上昇させることができるのではないか。

しかし，葛西・永尾（2004）の研究では，祖父母との生活の有無は，中学生の自尊感情や親子関係に与える影響は少ないという結果であった。それに対して，關戸（2001）は，祖父母が「話をよく聞いてくれる」「なんでも相談にのってくれる」「自分を理解してくれる」というような受容は，孫の自己受容的な人格形成に影響をおよぼしていると示唆している。同居という物理的な環境ではなくて，良い人間関係が祖父母との間に築かれているかどうかという質が人格形成に影響をおよぼしているという。

関係の質が重要だとしても，一般に祖父母と同居しているほうが別居しているよりも，祖父母の影響は大きいだろう。また，現在は同居していないが，同居したことのある祖父母との関係は，一度も同居したことがない祖父母との関係よりも孫に対する影響力は大きいだろう。

以上の点を踏まえて，次のような基本的な仮説を設定した。仮説１：祖父母が孫を理解し受容しているほど，孫の自尊感情や自己受容が高くなる。仮説２：祖父母の影響力は，大きいものから現在同居している，過去に同居したことがある，一度も同居したことがないという順番になるだろう。

祖母と祖父の影響の違い

従来の研究では祖父母の影響は分離されていないが，祖父母の影響を同列に論じることはできない。特に，女子学生の場合，同性である祖母からの影響のほうが祖父からの影響よりも大きいだろう。同性の祖母のなかに生きる姿をみることができる。つまり，田畑ほか（1996）の指摘する「時間的展望促進」「世代継承促進」の機能について，女子学生にとって祖母の影響は大きい。祖母は女子学生にとって，人生のモデルや指針となる。そうすると，女子学生は自己の生き方の展望をもつことができ，自己の位置付けをより確かものにすることができる。それに支えられて，自尊感情や自己受容が形成される。

他方，祖父に関しては，親子関係にはない良い距離感が，心の支えや理解につながるだろう。このように，孫と祖父母とが同性であるかどうかでその影響に違いがみられると予想され，次のような仮説を立てることができる。仮説３：祖母を自分自身の生き方のモデルや指針としている女子学生ほど，自尊感情や自己受容が高くなる。

方　法

1　手続き

女子大学生を対象に，講義開始前または終了後に無記名で記入してもらい，その場で回収した。約15分間の調査であった。まず，一番かかわりのある祖父母を１名挙げてもらって，祖父母との関係について項目への回答を求めた。その祖父母と現在同居しているか，過去同居していたか，同居したことがないか（別居）なども尋ねた。その後，自分自身の自尊感情や自己受容について尺度への回答を求めた。

2　調査期間　平成26年７月

3　分析対象者

女子大学の学生362名を対象として質問紙調査をおこなった。対象者は，主として児童学科と史学科の学生１・２・３回生で，記入漏れのない313名のデータを分析の対象とした。対象となる祖父母との居住状態の内訳は表１に示す。

4　測定尺度

⑴　**自尊感情尺度**　自尊感情を測定するためにローゼンバーグの自尊感情尺度を使用し，５件法（５．あてはまる，４．ややあてはまる，３．どちらともいえない，２．ややあてはまらない，１．あてはまらない）で評定を求めた（山本・松井・山成，1982）。

⑵　**自己受容尺度**　自己受容について菱田（2006）の尺度を参考に作成した。５件法（５．あてはまる，４．ややあてはまる，３．どちらともいえない，２．ややあてはまらない，１．あてはまらない）で評定を求めた。

表１　祖父母との同居・別居の内訳人数

	同居	過去同居	別居	計
祖父	13	5	29	47
祖母	63	25	178	266
計	76	30	207	313

孫と祖父母との関係　子どもと祖父母の関係を測定するため孫・祖父母関係評価尺度【孫版】（田畑ほか，1996）を参考に作成した。この尺度は，【存在受容機能】【日常的，情緒的援助機能】【時間的展望促進機能】【世代継承性促進機能】の５つの下位尺度から成っていた。尺度内に逆転項目が存在していなかったため，逆転項目を２項目付け加えた。５件法（５．あてはまる，４．ややあてはまる，３．どちらともいえない，２．ややあてはまらない，１．あてはまらない）で評定を求めた。

結　果

1　尺度の因子分析

それぞれの尺度について因子分析をおこなった。まず主成分分析をおこない，固有値の変動（スクリープロット）と説明された分散の値に注目して因子数を決定した。次に最尤法で因子分析をおこない，プロマックス回転をおこなった（足立，2006）。因子パターンから各因子に負荷の高い項目（原則として0.30以上）に注目し，尺度を構成する項目とした。そして，各尺度に関する α 係数を算出した。

⑴　**自尊感情の因子**

自尊感情について因子分析をおこなった結果，２つの因子が得られた（表２）。高く負荷する項目内容から，第１因子は自分には長所があるという「自尊心」，第２因子は自分はだめな人間だという「自己拒否」の因子と命名した。各因子に対応する尺度の α 係数は高い値を示した。

⑵　**自己受容の因子**

因子分析の結果いずれの因子にも負荷量が低かった１項目を削除し，再度因子分析をおこない，最終的に３因子を得た（表３）。第１因子は自分の個性が好きだという「自己肯定」，第２因子は自分の弱点も大切だと思うという「弱点受容」，第３因子は自分をいたわり，感謝したいという自己に対する「いたわり感謝」の因子と命名した。α 係数は高い値を示した。

⑶　**孫・祖父母関係の因子**

因子分析の結果，どの因子にも負荷量が低かった１項目を削除し，再度因子分析をおこない，最終的に３因子を得た（表４）。高く負荷する項目内容から，第１因子は，祖父母が心の支えになり安心できるという「心の支え」因子と命名した。第２因子は，祖父母の姿をみて将来の自分を想像し自己のモデルとするという

表２　自尊感情の因子と項目（α係数）

第１因子「自尊心」(.844)
1　私には結構長所があると感じる
2　自分は，少なくとも他の人と同じくらいに物事がこなせる
3　私は，自分のことを前向きに感じている
4　私は自分自身にだいたい満足している
5　私は，他の人と同じくらいに物事がこなせる
第２因子「自己拒否」(.796)
1　自分のことをもう少し尊敬できたらいいと思う
2　時々，自分は全くだめだと思うことがある
3　時々,自分は役に立たないと強く感じることがある
4　よく，私は落ちこぼれだと思ってしまう
5　私には誇れるものが大して無いと感じる

表３　自己受容の因子と項目（α係数）

第１因子「自己肯定」(.808)
1　周りの人をうらやましいと思うことが多い*
2　自分を嫌いではない
3　自分の弱さを何とかしてなくしたい*
4　自分の長所がよく分からない*
5　私には，とても気に入っている所がある
6　自分の個性が好きだ
7　誰に反論されても揺るがない，自分の考えをもっている
8　自分の考え方や行動の仕方がよく分かっている
9　周りの人々は，私の才能を認めてくれる
10　悩んでいるときの自分の姿も好きだ
11　私は生まれてこなかったほうがよかったと思うことがある*
第２因子「弱点受容」(.811)
1　私の中にある弱点にも，人間としての意味があると思う
2　自分の弱点も自分なので,その弱点も大切だと思う
3　私の中の弱点も，見方を変えれば良い面でもあると思う
4　自分にふさわしい役割があると思う
5　自分の弱さは，人の弱さを理解するのに役に立つと思う
6　自分が生まれてきたことに感謝したい
第３因子「いたわり感謝」（.748）
1　自分をほめてやりたいと思うことがある
2　自分に優しい気持ちになることがある
3　自分を，いたわりたいと思うことがある
4　自分はどんな人間だろうかと考えるのが好きだ
5　自分の身体と心をいたわる気持ちをもっている

*逆転項目

表４　孫・祖父母関係の因子と項目（α係数）

第１因子「心の支え」(.890)
1　悩みや，揉め事があったときなど，祖父(祖母)が何もしなくてもいるだけで，心の支えになると思う
2　自分ではどうにもならなくなった時，最後に頼りになるのは祖父（祖母）だなあと思う
3　親には言えないことでも，祖父（祖母）には話せることがある
4　つらいことがあるとき，祖父（祖母）を思うと，気持ちが慰められることがある
5　祖父（祖母）がいるだけでなんとなく安心できる気がする
6　祖父（祖母）は，私が悩んでいるときなど，必要なときにアドバイスしてくれる
7　私は，将来，祖父（祖母）のようになりたいと思うことがある
8　祖父（祖母）は，私の知らない親のことを教えてくれる
9　祖父（祖母）は両親が忙しいときなど両親の代わりに，私のことを色々してくれる
第２因子「人生の指針」(.890)
1　祖父（祖母）の姿から，自分が年をとったとき，どうなりたいか想像することがある
2　祖父（祖母）の姿から，人の一生について積極的に考えてみることがある
3　祖父（祖母）の姿から，自分のこれからの生き方を前向きに考えることがある
4　祖父（祖母）の姿から，人の死について考えてみることがある
5　祖父（祖母）の若い頃の話を聞くと，今の自分の生き方に参考になることがある
6　祖父（祖母）は若い頃の，社会の様子や暮らしについて話してくれる
7　祖父（祖母）は，昔からのしきたりや人生の経験を教えてくれる
8　祖父（祖母）の姿から，親は祖父（祖母）に似ているなあと実感する
9　私には，祖父（祖母）からひきついだ，長所があるなと思う
10　祖父（祖母）を見ると，親や自分もなんとなく似ているなあとしみじみ思う
第３因子「理解共感」(.822)
1　祖父(祖母)は,私に興味や関心を持っていてくれる
2　祖父（祖母）は，私の気持ちを理解しようとしてくれる
3　祖父（祖母）は，私がいると気まずそうにする
4　祖父(祖母)は,私のからだの具合を気遣ってくれる
5　祖父（祖母）は，私の気持ちに共感してくれない
6　祖父（祖母）は何があっても私のことを見捨てないと思う
7　親は私を叱っても，祖父（祖母）は大目に見てくれることがある

表５　尺度間の相関

	頻度	自尊心	自己拒否	自己肯定	弱点受容	いたわり	心の支え	人生の指針	理解共感
頻度	1	.037	.007	.043	.058	.081	.174**	.185**	.051
自尊心	.037	1	−.653**	.753**	.499**	.397**	.137*	.177**	.122*
自己拒否	.007	−.653**	1	−.664**	−.333**	−.152**	−.064	−.019	−.019
自己肯定	.043	.753**	−.664**	1	.518**	.437**	.125*	.156**	.094
弱点受容	.058	.499**	−.333**	.518**	1	.481**	.234**	.296**	.188**
いたわり	.081	.397**	−.152**	.437**	.481**	1	.161**	.259**	.194**
心の支え	.174**	.137*	−.064	.125*	.234**	.161**	1	.680**	.662**
人生の指針	.185**	.177**	−.019	.156**	.296**	.259**	.680**	1	.530**
理解共感	.051	.122*	−.019	.094	.188**	.194**	.662**	.530**	1

*p＜.05,　**p＜.01

「人生の指針」因子と命名した。第３因子は，祖父母が自分の気持ちを理解し共感してくれるという「理解共感」因子と命名した。「心の支え」因子と「理解共感」因子は受容的態度を示している。α係数は.890，.838，.822 といずれも高かった。

⑷　尺度得点の相関

各尺度の度数分布は，「理解共感」尺度のみが高得点のほうに偏っていたが，他の尺度はほぼ正規分布に近いものであった。尺度間の相関係数を表５に示す。「心の支え」「人生の指針」「理解共感」の間には高い正の相関がみられた。また，「自尊心」「自己肯定」の間にも高い正の相関があり，「弱点受容」と「いたわり感謝」の間には中程度の相関があった。

２　共分散構造分析の結果

仮説を検証するにあたって，変数を整理するために潜在変数を導入した。まず，自尊感情と自己受容の５つの変数の２次因子分析による因子パターンを参考にして，「自尊心」「自己肯定」「自己拒否」から『自尊感情』，「いたわり感謝」と「弱点受容」から『自己受容』という潜在変数を導入した。この際『自尊感情』について多重共線性がみられたので，研究目的を考慮して「自己拒否」を外すこととした。仮説に沿って，祖父と祖母ごとに，同居，過去同居，別居別にパスモデルを作成し，共分散構造分析をおこなった。分析の結果，祖母についてはいずれモデルも適合性の指標は高い値を示した。パス係数が５％レベルの有意なパスのみを残した。

祖母について

⑴　祖母（現在同居）

孫・祖父母関係の３つの因子を説明変数として共分散構造分析をおこなった。最も適合性の高かったパスモデルを図１に示す。「人生の指針」は，『自尊感情』と『自己受容』を高めていた。『自尊感情』に関する説明率は６％，『自己受容』に関する説明率は16％であった。

⑵　祖母（過去同居）

分析を進めるなかで，『自己受容』という潜在変数の導入が適合しないことがわかったので，元の因子に戻して分析をおこなった。その結果，適合性の高いパスモデルが得られた（図２）。「人生の指針」は，「いたわり感謝」を高めており，その説明率は34％と比較的高い値であった。

⑶　祖母（別居）

分析の結果，比較的適合性の高いパスモデルが得られ，「人生の指針」が『自尊感情』と『自己受容』を高めており，説明率はそれぞれ２％と10％であった（図３）。

ところで，自己受容や自尊感情の高い子どもが，祖母の姿のなかに自己の人生の指針やモデルを強く認知しているという可能性がある。そこで，孫から祖母への影響について検討した結果，パス係数は低くモデルの適合性も低かった。

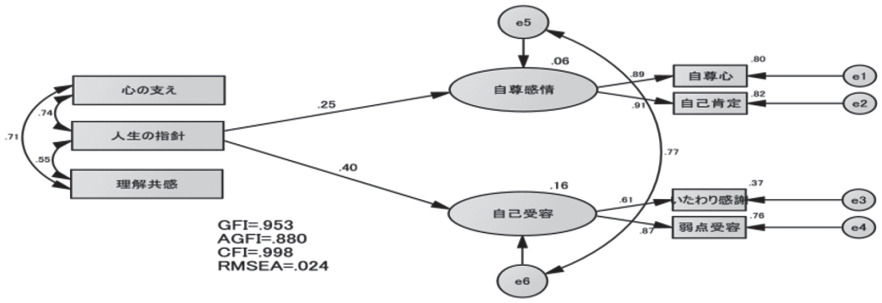

図１　現在同居の祖母

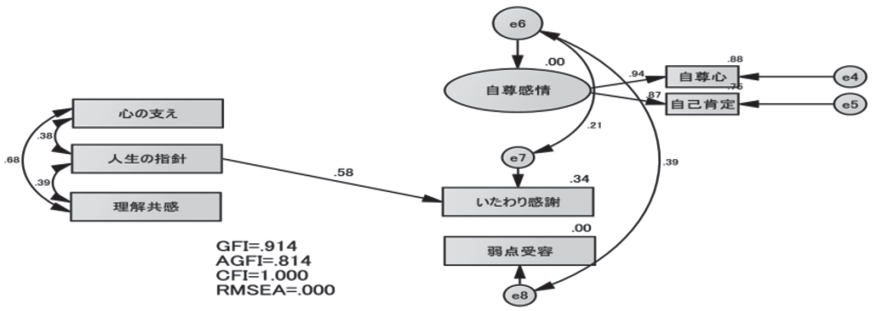

図２　過去同居の祖母

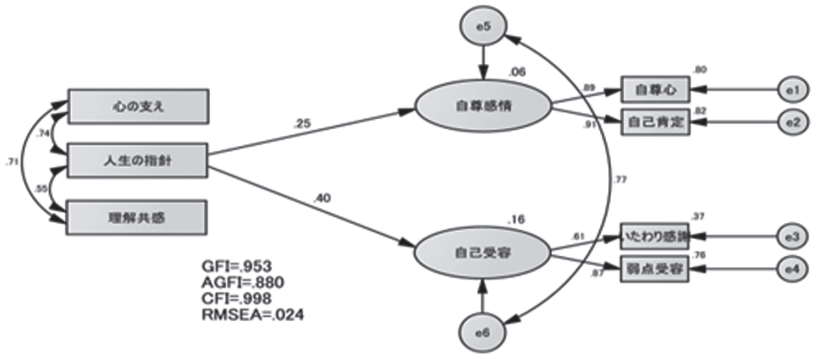

図３　別居の祖母

祖父について

⑴　祖父（現在同居）

共分散構造分析の結果，適合性の指標はGFI=.773，RMSEA=.202と高くはなかった。有意なパスに注目すると，「心の支え」は『自尊感情』を高め，「理解共感」は『自己受容』を高めており，それぞれの説明率は，25％，50％と高い値を示していた。

⑵　過去同居の祖父については，標本数が５と少なく，分析は行わなかった。⑶　別居の祖父について同じように共分散構造分析をおこなったところ，有意なパスがみられなかった。

3　分散分析の結果

パス解析では，直線回帰を想定しているため，説明変数間に交互作用がある場合，必ずしも有意なパスを示さないことがある。そこで，孫・祖父母関係の３尺度を組み合わせ，独立変数とし，自尊感情・自己受容の５尺度それぞれ従属変数として２要因の分散分析をおこなった。そのために，独立変数にあたる尺度について，各尺度得点の中央値をもとに得点の高い群（H群）と低い群（L群）に分けた。分散分析結果の交互作用に注目した結果，以下のように現在同居の祖母についてのみ有意な交互作用がみられた。

⑴「いたわり感謝」に関して，「心の支え」要因と「人生の指針」要因の交互作用が有意であった（$F(1,59)=9.665$, $p<.01$）。その後の検定をおこなった結果，「心の支え」H群では「人生の指針」H群のほうがL群よりも「いたわり感謝」得点が高かった（図５）。また，「人生の指針」H群では，「心の支え」H群のほうがL群よりも「いたわり感謝」得点が有意に高く，その反対に「人生の指針」L群では，「心の支え」H群のほうがL群よりも「いたわり感謝」得点が有意に低かった。つまり，「心の支え」が高くて「人生の指針」も高い群（HH群）の「いたわり感謝」が非常に高く，「心の支え」が高くて「人生の指針」が低い群（HL群）の「いたわり感謝」が非常に低いということが明らかとなった。

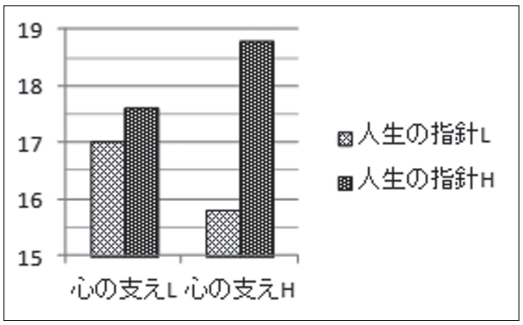

図５　心の支え×人生の指針と「いたわり感謝」

⑵「弱点受容」に関して，「理解共感」要因と「人生の指針」要因の交互作用が有意であった（$F(1,59)=13.444$, $p<.01$）。その後の検定をおこなった結果，「人生の指針」H群では「理解共感」H群のほうがL群よりも「弱点受容」得点が高かった（図６）。また，「理解共感」H群では，「人生の指針」H群のほうがL群よりも「弱点受容」得点が高かった。つまり，「理解共感」が高くて「人生の指針」も高い群（HH群）の「弱点受容」が非常に高いということが明らかとなった。

⑶　さらに「弱点受容」に関して，「理解共感」要因と「心の支え」要因の交互作用が有意であった（$F(1,59)=4.848$, $p<.05$）。その後の検定をおこなった結果，「理解共感」H群では「心の支え」H群のほうがL群よりも「弱点受容」得点が高かった（図７）。また，「心の支え」H群では，「理解共感」H群の方がL群よりも「弱点受容」得点が高かった。つまり，「理解共感」が高くて，「心の支え」も高い群（HH群）の「弱点受容」が非常に高いということが明らかとなった。

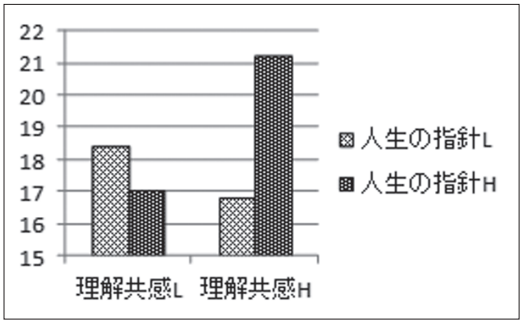

図６　理解共感×人生の指針と「弱点受容」

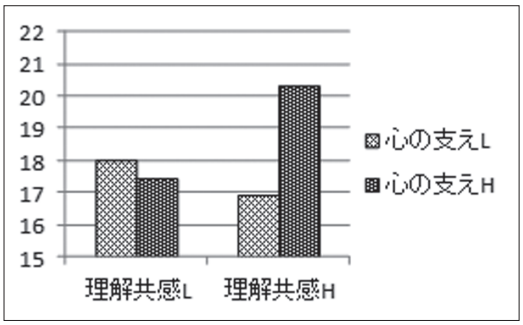

図７　理解共感×心の支えと「弱点受容」

考　察

祖父母と孫の関係

分散分析の結果，『自尊感情』を構成する「自尊心」と「自己肯定」に関する因子については，祖父母どちらに関しても要因間に有意な交互作用は認められなかった。また，共分散構造分析における『自尊感情』の説明率が低かったことからも，孫・祖父母関係は，全体として自尊感情より自己受容に大きな影響をもたらすといえる。

祖母については，現在同居の場合は，人生の指針としての祖母の生き方が女子大学生の自己受容と自尊感情の両方に影響を与えていた。過去同居や別居の祖母の場合は，人生の指針は孫の自己受容の側面にのみ影響していた。祖父については，現在同居の場合にのみ理解共感と心の支えが影響している可能性があった。したがって，仮説１は現在同居の祖父について支持される可能性がある。仮説２について，現在同居の祖父母の影響は強く，別居の祖父母の影響は弱く，仮説は基本的に支持されたといえる。

子育てをする母親にとって，自分自身の両親が遠くに住んでいる場合は近くに住んでいる場合よりもストレスが高いことが指摘されている（椋本，2009）。したがって，孫にとっても母親にとっても，祖父母が近くに住んでいるとか，交流のしやすいところに住んでいるかどうかは大切な要因かもしれない。

しかし，關戸（2001）が指摘するように，重要なことは祖父母との同居か別居かという物理的な問題ではなくて，良い人間関係が築かれているかどうかという質の問題である。たとえ祖父母と関わる頻度が多くても，良い人間関係が築かれていないこともある。したがって，同居か別居かという居住状態は，孫に直接影響するのではなく，親密な良い関係やわるい関係の形成に影響する要因として働き，同居の場合に祖父母の影響が顕著に表れたと解釈するのが妥当であろう。

Mansson（2001）の18から25歳を対象とした研究によると，孫と祖父母の良い関係維持には，祖父母の愛情の認知や祖父母への信頼が関係していることがわかった。その中で，特に信頼が対人関係における中心的な特徴だということが示された。また，Chan & Elder（2000）によると，母親と母方の家系との関係がよいほど，孫と母方の祖母との親和的な結びつきを高めていた。父親と父方の家系についても同じようなことがいえたが，母親と母方の祖母関係のほうが影響は大きかった。

祖父母と孫との良い関係が築かれるためには，何よりも子どもが小さいときから両親が祖父母と豊かなつながりを持つことが，重要だろう。たとえ祖父母と同居していなくても，互いに交流のしやすいところに住むことはその可能性を高めることになる。また，たとえ遠くに住んでいても，電話やメールなどの媒体を通じて交流することもできる。

祖母の「人生の指針」

共分散構造分析の結果，祖母について次のことが明らかとなった。現在同居の祖母について，祖母を「人生の指針」としているほど，孫の『自尊感情』や『自己受容』が高かった。別居の祖母については，そのような影響は同居の祖母に比べると弱かった。過去同居の祖母に関しては，「人生の指針」は自己への「いたわり感謝」因子を強く高めていた。このような結果は，裏返せば，祖母が「人生の指針」とならない場合は，孫の「自尊感情」や「自己受容」を低下させるということを意味している。

前原・金城・稲谷（2000）の研究では，母方祖母が孫娘を優しく受け入れ世話するという女性の伝統的役割を通して孫娘との親密な関係を維持していた。今回の調査では母方祖母とは限っていないが，祖母は母方父方を問わず同じような機能を果たしているのではないか。祖母との密接なかかわりのなかで，孫は祖母を人生のモデルや指針とする機会が多く，その影響が大きいと推察される。

上記の結果から，現在同居している祖母だけでなく，特に，過去同居の祖母に関する「人生の指針」は，孫の「いたわり感謝」因子を高めていることが明らかとなった。つまり，過去に同居し現在もつながりを持ちつつ祖母を自分の

人生の指針としていることが，自己受容の重要な側面を支えているといえるのではないか。ここに，女子学生にとって同性としての祖母の存在の重要性が示された。「人生の指針」因子は，田畑ほか（1996）の「時間的展望促進」と「世代継承促進」因子の内容に対応している。この因子には，自分の生き方のモデルだけでなく，祖母の姿のなかに自分の人生を考える視点や，祖父母から親へ，親から自分へ伝わっているものを肯定的に受け止める視点が含まれている。そのような視点が，自己の弱点やありのままの姿をいたわり感謝して受け入れるという自己受容を高めているのだろう。

それとは違った視点から，自己受容や自尊感情の高い子どもが，祖母のなかに自己の人生の指針を強く認知しているという可能性がある。そこで，孫から祖母への影響についてパス解析をおこなった。その結果，すでに述べたように，パス係数は低くモデルの適合性も低かった。したがって，祖母から孫への影響が大きく，仮説３は基本的に支持されたといえる。

現在同居しているという要因は，孫と祖母の人間関係に強い影響を与え，その親密な関係に大きな個人差を生み出している。また，過去に同居したことがある祖母については，別居という空間的なものを超えた時間的なつながりの要因が働いているだろう。そのようなことが上記のような結果に反映しているだろう。それに対して，一度も同居したことのない祖母については，その影響は弱かった。このことは，同居したことがない祖母と孫の間には親密な関係が形成されにくいことを反映しているだろう。

祖母の「理解共感」や「心の支え」からは有意なパスがみられなかった。しかし，このことは，祖母の「心の支え」や「理解共感」は孫の「自尊感情」や「自己受容」と関連がないということを意味しているわけではない。「心の支え」尺度と「理解共感」尺度は共に「人生の指針」尺度と相関が高かった。したがって，パス係数（偏回帰係数）の性質上，「心の支え」や「理解共感」の影響は，「人生の指針」の影響のなかに吸収されたものと理解できる。言い換えれば，「人生の指針」が「心の支え」や「理解共感」を代表していると解釈される。

事実，分散分析の結果から，現在同居の祖母について次のような結果が得られた。①「心の支え」が高くて「人生の指針」も高い群の「いたわり感謝」得点が非常に高かった。②また「理解共感」が高くて「心の支え」も高い群の「弱点受容」得点が非常に高かった。③さらに「理解共感」が高くて「人生の指針」も高い群の「弱点受容」得点が非常に高かった。本研究において「弱点受容」と「いたわり感謝」は『自己受容』を構成する因子である。したがって，祖母からの「心の支え」「人生の指針」「理解共感」は孫の自己受容を支えているといえる。

渡辺（2008）は，子どもが成長し祖父母と関わる頻度は減少していくが，祖父母への関心が消失するわけではないという。同居や過去の同居というつながりのなかで祖母との交流があり，祖母の変化していく姿のなかに人生のモデルや指針を見出す。そのことによって，すでに述べたように，孫は広い視点や時間的展望のもとで自分自身をとらえ，さらに祖母の受容や理解共感に支えられて自己受容や自尊感情を高めることになるのではないか。

その反面，④「心の支え」が高くて「人生の指針」が低い群の「いたわり感謝」得点は非常に低かった。このような，祖母からの「心の支え」が高くても祖母が自己の生き方のモデルや「人生の指針」とならない場合は，自己に対する「いたわり感謝」が低かった点は注目される。すでに述べたように，「人生の指針」因子には，祖母の姿を通して自分の人生を考える視点や，祖父母から親を介して自分へ伝わっているものを肯定的に受け止める視点が含まれている。たとえ「心の支え」が高くても，そのような視点が形成されていないことが，自己受容を低下させたのだと解釈される。

祖父の「理解共感」

祖父について共分散構造分析の結果は適合性の低いモデルではあったが，次のようなことが示唆された。現在同居の祖父について，祖父を「心の支え」としているほど孫の『自尊感情』

が高く，祖父の「理解共感」が高いほど孫の『自己受容』が高かった。特に，祖父の「理解共感」から孫の『自己受容』への影響は強かった。他方，「人生の指針」から『自尊感情』や『自己受容』へのパスは有意でなく，祖母との大きな違いが認められた。また，これまで一度も同居したことのない祖父については有意なパスは一切みられなかった。

祖父は女子学生にとっては異性であり，祖母と比較して「人生の指針」としての祖父の影響は少ないと理解される。それに対して，祖父の「理解共感」は孫の『自己受容』に強い影響を与え，自分のことを理解共感してくれるということが，孫の自己受容を高めていた。祖父は異性であり，祖母は同性であるということが，祖母と祖父の影響の差異を生み出したのだろう。

一度も同居したことのない祖父の影響はみられなかった。このような祖父と孫娘との間には，親密な関係が築きにくいのかもしれない。

今後の課題

女子学生を対象としたために，一番かかわりがあった祖父母は，同性である祖母と答えた学生が非常に多かった。そのために祖父に関するデータが少なくて分析できない場合もあった。また，すでに述べたように，従来の研究では祖父母が父方か母方かによっても，その影響は異なっていた。したがって，同居か別居か，大家族か核家族かという問題とともに，この点についての分析も今後必要だろう。さらに，祖父母が亡くなって今はいない場合についての分析も重要である。

本研究では孫と祖父母との関係のみを扱ったが，同時に父母との関係にも注目して，それら相互の関連を探る必要があるだろう。また，女子大学生のみを研究対象としたが，男子大学生の場合はどうかについて検討する必要がある。さらに，より年少の孫と祖父母との関係について年齢を追っての研究も必要で，多くの課題が残されている。

引用文献

足立浩平（2006）．多変量データ解析法―心理・教育・社会系のための入門―　ナカニシヤ出版

Barnett, M. A., Scaramella, L. V., Neppl, T. K., Ontai, L.L., & Conger, R. D.（2010）. Grandmother involvement as a protective factor for early childhood social adjustment. *Journal of Family Psychology*, **24**, 635－645.

Chan, C.G., & Elder, G. H. Jr.（2000）. Matrilineal advantage in grandchild–grandparent relations. *Gerontologist*, **40**, 179－190.

田陽子（2006）．現代青年の自己受容に関する分析的研究(4)―自我状態との関係について―北陸学院短期大学紀要，**38**，219－232.

葛西真記子・永尾修一（2004）．中学生の自尊感情・規範意識と親子関係との関連性　鳴門教育大学学校教育実践センター紀要，**19**，25－34.

北尾倫彦・中島実・林龍平・広瀬雄彦・高岡昌子・伊藤美加（2010）．コンパクト教育心理学 教師になる人のために　北大路書房.

小嶋秀夫・森下正康（2009）．児童心理学への招待　［改訂版］学童期の発達と生活　サイエンス社.

前原武子・金城育子・稲谷ふみ枝（2000）．続柄の違う祖父母と孫の関係　教育心理学研究，**48**，120－127.

Mansson, D. H.（2014）. Trust as a mediator Between affection and relational maintenance in the grandparent-grandchild relationship *Southern Communication Journal*, **79**, 180－200.

椋本真由子（2009）．育児不安の諸相とソーシャルサポートの効果　京都女子大学大学院発達教育学研究科（児童学専攻）修士論文.

中間玲子（2007）．自尊感情を育てる自尊感情の心理学　児童心理，**61**(10)，884－889.

佐々木久長（1994）．家族との接触が性格形成に与える影響について―三世代同居家族における特徴―　聖霊女子短期大学紀要，**22**，32－39.

關戸啓子（2001）．祖父母との人間関係が大学生の自己受容と対人態度に及ぼす影響　川崎医療福祉学会誌，**1**，49－55.

杉井順子（2006）．祖父母と孫との世代間関係：孫の年齢による関係性の変化　奈良教育大学紀要（人文社会），**55**，177－189.

田畑治・星野和実・佐藤朗子・坪井さとみ・橋本剛・遠藤英俊（1996）．青年期における孫・祖父母関係評価尺度の作成　心理学研究，**67**，375－381.

渡辺由己（2008）．大学生の孫による，祖父母との関わりに関する研究．吉備国際大学社会福祉学部　研究紀要，**13**，115－122.

山本真理子・松井豊・山成由紀子（1982）．認知された自己の諸側面の構造　教育心理学研究，**30**，64－68.